

屋根瓦が語る近代化のかたち

渡 邊 誠

はじめに

- ・考古学の対象はどこまでか。考現学、路上観察学、民俗学との境界は？
- ・考古学者は貧乏性。
- ・社会環境の変化とモノの研究：
 - 高度成長期以後の瓦礫の処理の変化（特に2000年以降か）
→土地との文脈が引きはがされる。
 - 集落の遺跡化（島嶼部、山間部）
- ・瓦という素材
 - 雨風をしのぐ屋根材として耐久性に優れ、長期間にわたり利用できるという特徴から、古来より寺院や役所、城郭などの地域の重要な建物に葺かれ、江戸時代の終わり頃から、次第に町屋などの民衆の建物や地域の庄屋などの主屋（四方蓋造の下野など）に葺かれるようになる。近代以降、瓦葺き屋根は公共施設等の建設ラッシュの中で増加し、さらには一般的な民家にも次第に広がり、建物の屋根材として広く普及し、その価値が大きく変化している（山崎2019）。ただ、現代では、屋根や住居の構造が多様化し、瓦葺きの住宅は選択肢の一つに過ぎない。
- ・「現役瓦」の魅力と限界
 - 古い建物の屋根瓦をマニアックに見てみると、多様な文様（意匠）の瓦が葺かれていることがわかる。これらは、建物の修理、改築などの建物が過ごした時間（文脈）を示している。他の部材では検討が困難な建物の歴史を紐解く情報をもっている。また、こうした建物が集まる地域では、屋根が折り重なることで、地域の景観を作り出すだけでなく、道路や側溝などの構造物と共に地域（まち）を観察すると、そのまちの歴史を紐解くこともできる。
 - その一方で、所詮消耗材であり、建物は残されても、すぐに取り換えられてしまい、日々、失われている。こうした古民家などの近代以降瓦（現役瓦）の調査・研究はまったなしの状況である。

1 香川県における近代前後の瓦生産に関する研究と本講座の目的

- 1) 生産技術としての達磨窯の調査研究（寺田1954、藤原2001等）
- 2) 瓦に関する研究
 - 高松城跡の編年研究（佐藤2003、渡邊2017）
 - 丸亀城跡の編年研究（竹内2018、中山・乗岡2022、谷2023）
 - 18世紀中頃以降に藩ごとに文様（意匠）の統一化が進行
 - 例）高松藩：半裁花菱文、丸亀藩、多度津藩：蔦葉文
 - 刻印からみた生産者の関する研究、現役瓦の調査（佐藤2000、2002、渡邊2021）
 - 文様（意匠）や刻印をもとに瓦生者の特定
 - 例）高松城下の瓦町周辺と郊外の檀紙・御厩周辺地域
 - 高松市郊外（空港跡地遺跡）の林村周辺の生産地／者の存在
 - 近代以降の瓦の文様（意匠）の変化（渡邊2021）

今回の講座における3つの視点

- 1) 近代前後の瓦の変化からみえる近代化
- 2) 刻印や統計からみえる瓦職人／生産者の近代化
- 3) 現役瓦がつくりだす景観からよみとく近代化

2 資料と方法

1) 対象資料

燻瓦、粘土瓦と呼ばれるもの

- ・発掘調査資料（高松城跡などの遺跡から出土した資料）
- ・現役瓦：
 - 指定文化財や登録文化財、近世社寺建築や近代和風建築、近代化遺産の調査で年代が明らかになっている建物に葺かれている瓦
 - 調査や修理時に観察できる機会を得た瓦
 - 巷に残る古い瓦を葺いている建物に葺かれている瓦
- ・軒下や敷地の片隅に無造作に集積されている瓦
- ・建物の取り壊し等に際して個人的に譲り受けた瓦（廃棄されそうになっていたもの）
- ・古写真や戦前の建物の写真、拓本資料等の画像資料

2) 対象時期

江戸時代後期から戦前（1800～1945年頃）

3) 対象地域

香川県全域（高松、東讃、中讃、小豆島、直島を中心）

4) 分析作業

①瓦の組み合わせと年代の特定：編年

(ア) 資料の収集と観察（フィールドワーク（写真撮影等）含む）

(イ) 瓦の文様+製作技法による分類

本瓦葺き：軒丸瓦、軒平瓦

棧瓦葺き：本瓦葺きの瓦をもとに分類

(ウ) 一つの建物における使用状況、組み合わせを調べ、建築当初や葺替え時の瓦の組み合わせを特定する

(エ) 建物の年代等にもとづく製作（使用）年代の特定

*必ずしも棟札が示す年代=葺かれている瓦の年代ではない。現況は建物が経た歴史の最終期を反映しており、建築年代、大規模修理などの修理履歴を、数量などから考える必要がある。ただし、様々な時代の瓦が様々な経緯で屋根の上で共存しているため、建築や修理の年代と一致する瓦を抽出する作業が難しい場合も少なくない。そのため、(ア)～(エ)の作業を何度も繰り返すことで、定量的な検討を進め、組み合わせや年代の精度の向上を図り、組み合わせの地域的な特徴や年代的なずれ（時期差）などについても検討していく必要がある。

→そのため、情報量が増えると改定されていく宿命

②瓦の生産者や生産地の特定

軒平瓦の文様（意匠）の種類特定と刻印の収集

→組み合わせで生産地を特定

*刻印が押されている場所

軒丸瓦、丸瓦は凸面、軒平瓦は外縁左右のいずれか、平瓦は狭端部。

ただし、施工時には見えるが、施工後はわからない。

③小地域の分布の把握

面的にまとまってよく残っている範囲の把握

3 分析

1) 近代前後の瓦の変化からみえる近代化

①編年(図2・表1)

時期	年代	瓦の種類	備考
第1期	1800~1887 (文化年間前後~幕末頃)	軒丸瓦1類、2類 軒平瓦1A類 軒丸瓦1類、2類 軒平瓦1B・1C類	固定方法の変化 (釘→銅線等)
第2期	1888~1925 (明治20年代後半) (出現は1881年~)	軒丸瓦3類(蛇の目) 軒平瓦2類(凹型) 地域型の文様が出現	棧瓦の普及 (左軒棧瓦から軒棧瓦 に変化、鎌形の出現) 瓦の大型化(棧瓦) 平瓦・棧瓦の凸面に斜 格子目の圧痕
	1912~1925 (大正)	軒丸瓦4類 軒平瓦3類(石持)	本瓦葺き:少 棧瓦葺き:主 鎌形棧瓦、一文字
第3期	1926~ (大正末/昭和初期)	軒丸瓦5類 軒平瓦3類(万十)	本瓦葺き:少 棧瓦葺き:主 鎌形棧瓦
第4期	1965~	軒丸瓦5類 軒平瓦3類(万十)	釉薬瓦

②分布

軒平瓦の文様(意匠)として検討

- ・半裁花菱文(高松藩系:檀紙・御厩系、新瓦町系、地域型(池田型、直島型など))
- ・蔦葉文(丸亀藩系・多度津藩系)
- ・牡丹文(仮)などの花文系
- ・橘文(大坂系)
- ・巴文(岡山系)
- ・その他(半裁菊花文(富田型など))
- ・蛇の目(軒丸瓦3類、軒平瓦2類、軒棧瓦(3類+2類))
- ・石持(軒丸瓦4類、軒平瓦3類、軒棧瓦(4類+3類))
- ・万十(軒丸瓦5類、軒平瓦3類、軒棧瓦(5類+3類))
- ・一文字

■時期別の様相

第1期(1800~1886頃)

- ・瓦の文様(意匠)によって分布圏が異なり、藩の領域とは一致しない。

江戸時代以来の文様系譜のものとそれから派生した文様の瓦が存在。

橘文(大坂系:東讃地域(さぬき市志度町以東)の海浜部、小豆島、金刀比羅宮周辺
地元の生産地(生産者)は不明。東讃、小豆島においては淡路島やたつの市(御津町伊津浦)などから瓦が供給された可能性がある。

例) 東かがわ市の猪熊家住宅 役物瓦 へら書き「乙卯寛政七年 淡州津井村 瓦屋」
さぬき市津田町の実相寺 鬼瓦 へら書き「網干伊津浦 山本半十二郎作」

半裁花菱文系:高松市域~坂出、三木、さぬき市内陸部

19世紀初頭の半裁花菱文は高松藩の庇護を受けていた主要な神社、四国
霊場札所寺院のうち、第78番札所郷照寺から以東で主に確認できる。

鳶葉文系：坂出市以東

半裁花菱文系と鳶葉文系の境界は綾歌郡宇多津町、綾川町、坂出市周辺

第2期～(1887～)

- ・無文化が対象地域全域に広がる：瓦の近代化
- ・無文化した瓦から職人や生産者の検討は困難
- ・半裁花菱文、鳶葉文の地域型に加えて、半裁菊花文などの新たな地域型が出現するが、分布圏は今後の検討が必要

2) 刻印や統計から見える瓦職人／生産者の近代化

19世紀頃から、瓦に生産者の名前が刻印として残されるようになる。これを手掛かりに地域での生産について検討しておきたい(佐藤2000・2002、渡邊2017・2021)。

①変遷

16世紀末から19世紀初頭：記号(家紋等含む)

19世紀以降：「地名+人名」／「人名の略称」、「地名+屋号」／「屋号の略称」

「地名+姓／屋号+人名」、「地名のみ」

20世紀以降：文字の表記に変更があるが、構成の変更はない。

*地名か人名かわからないものもある。刻印自体が増加傾向か。

②各地の生産の様相(半裁花菱文)

■御用瓦師の生産～檀紙・御厩村周辺の職人／生産者

- ・瓦生産の開始時期は明確ではないが、18世紀中頃以降と考えられる。
例) 金乗寺 寛政5(1793)年銘 本堂の鬼瓦
「寛政五丑年十月吉日 香川郡西御厩村瓦師傳右衛門」
屋島寺 文化4(1807)年築 御成門の鬼瓦
「香川郡西御厩邑 多田傳右衛門満昌」
国分寺の平瓦(拓本資料)
「文化五辰年 現住 仁寂代 みまや村」
「文化十三年子年当大守頼儀公御修覆之砌作 瓦師 ミマヤ村伝右エ門」
「文化十四年丑年三月 現主仁善代 瓦師 傳(伝)エ門」
- ・高松城及び城下町、藩が庇護した寺社(札所寺院等)で確認
- ・「傳右衛門」瓦は第3期の瓦に刻印が認められるが、「辰蔵」瓦の第1期まで。
→商標としての刻印 100年以上続く老舗ブランド瓦として維持
第1期 : 城郭、寺院、民家への瓦の供給
第2期～: 老舗としての伝統、技術を武器に販路を確保
- ・他の生産者: 「伊三郎」、「菊次郎」、「富治郎」、「喜代蔵」、「富次」(鬼瓦等)
→重文「小比賀家住宅」の刻印の事例から複数の職人／生産者で瓦を生産し、供給したことがわかる。
- ・第3期には「カネヤ」、「中谷」、それ以外に鬼無の「横倉」の新たな職人／生産者も確認でき、職人／生産者の盛衰を確認できる。

参考: 『日本瓦業総覧』昭和2年

檀紙村: 多田雪次(傳右衛門瓦の製作者)、妙見茂太郎、植野伊太郎、
喜多瓦工場、多田正義、井上竹治

その他の資料: 香川才助、多田要、中谷守太、真鍋政一

■城下の職人／生産者

- ・第2期：「新瓦町系」とその系譜と考えられる刻印「水谷」、「玉屋」
- 第3期：「岡野屋」、「三宅」

参考：『日本瓦業総覧』昭和2年
西瓦町の太田瓦工場、新瓦町の岡野利吉、松島町の三宅藤太郎、亀井房吉、関森瓦工場

■高松平野南部の職人／生産者

- ・林町、池田町周辺で半裁花菱文、菱形文を中心飾りとする瓦を製作する。
例) 林宗高遺跡：軒丸瓦2類、軒平瓦(半裁花菱文)、軒棧瓦(3類+2類)
空港跡地遺跡：軒丸瓦1・2・4類、軒平瓦(半裁花菱文)、2・3類、
軒棧瓦(2類+1B類)
- ・刻印から、林村の善右衛門、岡崎佐太郎、河野彦吉、池田村の喜代次郎という職人がいたことがわかる。
例) 「林善右衛門」・「林善」、「林村 河野彦吉」
「上林岡崎」・「□(木) 田郡林村 瓦製造人 岡崎佐太郎」・「岡」
「池田邑喜代次郎」・「池喜」

参考：『日本瓦業総覧』(昭和2年)
岡崎豊一(岡崎佐太郎の後継か)

- ・供給先として以下の建物や遺跡がある。
「善右衛門」瓦：真鍋家住宅(高松市林町) 明治8~20年頃
旧井上家住宅(郷屋敷)(高松市牟礼町) 明治初年
漆原家住宅(高松市三谷町)
空港跡地遺跡周辺(高松市林町)
林小学校(林宗高遺跡)(高松市林町)
明治8年 下林小学校建設、明治25年 林村立林尋常小学校建設
明治41年、大正7年の校舎増築
「喜代次郎」瓦：高原水車(高松市六条町)
矢野家住宅(三豊市豊中町)

③刻印、文献、統計からみた瓦職人／生産者の動向

- 第1期 : 家業としての職人で、城下町以外にも瓦職人／生産者が存在。
一つの建物に複数の瓦職人／生産者が瓦を供給している。
- 第2~3期 : 一つの地域に複数の職人／生産者が存在
瓦職人／生産者の入れ替わり(盛衰)を確認できる。
新たな地域での生産を確認できる。→各地域で地場産業となっていく
家業としての職人の存在が継続。「香川県統計書」から戸数当たり職工数は
3名程度(最大6名)で、経営規模も小さい。

3) 現役瓦がつくりだす景観からよみとく近代化(予察)

①現役瓦がよく残る場所の傾向

- 面：各地域の市街地、門前町、港町など
- 線：旧の街道、戦前に利用頻度が高かった道沿い
- 点：社寺、住宅

高松(扇町周辺)：本瓦葺きが多く、半裁花菱文が僅かに残り、第2期の瓦は石持が主体
坂出(市街地)：蔦葉文が主で、蔦葉文と半裁花菱文がセットになる。第2期の瓦は蛇の目が主体。

善通寺：蔦葉文が僅かに残り、第2期の瓦は蛇の目、石持がまとまって残る。

多度津(本通りから東浜)：本瓦葺きが多く、蔦葉文のほか、他の文様の瓦が多く残る。
通りの南北に第2期の石持が分布する。

・街路(メインストリート)に面する建物の葺き方

本瓦葺き、もしくは本瓦葺きと棧瓦葺きのハイブリット：伝統・格式を重んじた外観

第3期前後から棧瓦葺きへと変化する：近代化

建物の前面や塀などに第1期やそれ以前の瓦を使用する：伝統を示す。

→逆もある。

通りに面しない場所では棧瓦葺きが多く使用されている。

②写真等から見える傾向

- ・公共施設や洋館(画像資料含む)は棧瓦葺きが基本：近代化の象徴

4 屋根瓦からみえる近代化のかたち

1) 近代化の流れ(通時的視点)

①第1期：

- ・城下町での瓦の普及に加えて、寺社への供給を前提とした瓦生産が断続的にあり一方で、19世紀以後の瓦葺き建物の増加に伴い、需要が増えていた可能性がある。
- ・城の維持、藩の庇護を受けていた寺社等への瓦の供給を行っている瓦師が刻印を用いていることから、他者との差別化、すなわち品質への自負、責任、保証を意図して明示が志向されるようになったと考えられる。なお、瓦の流通していた経済圏、文化圏は藩の領域とは一致していない。こうした点は明治期前半における大きな変化ない。

②第2期：香川県成立以降、公共施設の建設に伴う瓦需要、住宅の瓦葺きの普及

- ・瓦の無文化は全国的な動向と考えられるが、本格的に公共施設等の整備が始まる段階に進み、瓦の近代化が図られることとなった。また同時に大量生産への対応に迫られたと考えられる。

参考：社会の動向

明治21(1888)年 香川県の成立(第3次)

明治23(1890)年～市制町村施行による高松市などの新たな行政区域の成立

→行政という枠組みの変更やそれに伴う様々な公共施設の整備等

鉄道、道路、港湾等のインフラ整備の進行

近代和風建築の出現(藤森1993b)

技術の進歩：機械化の進行による量産化

明治35(1902)年 石原熊次郎による石炭焚改良窯の開発

明治41(1908)年 松下早太郎による土練機を開発

大正4(1915)年 土練機の動力化

大正7(1918)年 松野惣八による瓦荒地機械の試作

大正8(1919)年 石油発動式の土練機

大正10(1921)年	手動式の成形機
大正11(1922)年	土練機の製造販売
大正13(1924)年	電動化したフリクション式成形機
大正15(1926)年	日本標準規格による瓦の規格化

ただし、「香川県統計書」によれば、明治40年から昭和13年までの生産者の戸数、職員の人数は緩やかに増加で、急激な増加は認められないため、江戸時代以降の小規模な経営スタイルは変化していないと考えられる。刻印から各地域に複数の瓦職人／生産者が所在しており、機械化への対応を図りつつも、職人同士の共同作業で需要に対応したと考えられる。全国の動向から組合が創設されたと考えられるが、江戸時代以降の仕組み、体制の中で瓦生産が続けられたと考えられる。

公共施設：

- ・近代化の象徴である無文化した軒棧瓦が使用され、軒瓦の意匠は重視されなくなり、瓦屋根の均質化が進む。その中で瓦職人／生産者の個性は失われ、瓦がもつ役割も変化したことを示している。職人としての証は品質と刻印によって明示されたと考えられる。

商店、住宅、寺社：

- ・無文化した軒棧瓦に加えて、各地域で考案され、共有された文様の瓦が使用される。瓦職人／生産者の個性が発揮できる場もあったと考えられる。

第3期：

- ・万十型へと変化する昭和時代初期(1926年前後)に関しては、第2期以降の瓦の大量生産と製作の機械化が進む中で、工程の簡素化が図られ、より統一化が進み、軒丸瓦4・5類や軒平瓦3類、軒棧瓦(4・5類+3類)が採用されたものと考えられる。特に、軒棧瓦(万十軒棧瓦)は、戦後以降現在に至るまでその形状を維持している点からも瓦の無文化の到達点と言え、効率的な瓦生産が進行したものと考えられる。
- ・『香川県の粘土製品工業』(香川県1957)によると、昭和29(1954)年には228社で、戦前よりは数が減少しているが、これは会社経営という形の中で、経営規模の大規模化に伴う現象と考えられる。戦後になり、ようやく生産体制の近代化が図られたと考えられる。

第4期：

- ・釉薬瓦の普及、住居構造の変化が生じる。
- ・瓦生産では、トンネル窯の導入によって(藤原2001、山崎2019ほか)、生産組織のさらなる大規模化(再編)が短期間で起こり、新たな時代を迎える。
- ・以上の点から、瓦と生産体制の近代化にはズレがあったと考えられる。そのため、近世的な瓦生産を継続させながら、機械化を導入したものと考えられる。各地域の職人同士の協力体制での対応が図られ、家業としての職人観の脱却まで至らなかったためか。

2) 景観の近代化(空間的視点)

- ・文様をもつ瓦を「近世的(伝統的)」、無文化した瓦を「近代的」という二項対立的に、各地域の現在の景観をみると、各地域の「まち」(中心地)の近代化の過程がみえる。

高松は、市街地中心部の状況は分からないが、第2期の後半以降、街道沿いや中心部の周辺が、近代化していく状況が見える。善通寺では、本郷通りの周辺の景観が第2期に近代化していく。一方で、多度津の金毘羅街道にあたる本通りを中心とした地域は「近世的」な瓦が多く使われており、瓦から見える近代化は海への拡張部分で認められ、第3期に近世以降の港町に近代化が進行する。このように、港町は近世以降の歴史を強く残しながら近代化が

進んだと考えられる。こうした二項対立的な把握、近代化の進行の過程を地域でみていくことで、県都や軍都の近代化の進行、近世以来の港町を近代化の様相を追跡でき、その地域(まち)の歩んだ近代化の歴史を読み取ることができるのではないだろうか。

おわりに

参考文献(発掘調査報告書は割愛)

- 石川繁治2001「三州瓦の歩み」『日本の瓦・三州の瓦』以文社
市川創2019『近世上方の屋瓦に関する基礎的研究』
井上要1927『日本瓦業総覧』日本瓦業総覧刊行会
上野時生1983『香川の明治建築』
上野時生1986『善通寺の原風景』
香川県1957『香川県の粘土製品工業』
香川県1987『香川県史』第五巻 通史編 近代 I
香川県教育委員会1981『香川県の近世社寺建築』
香川県教育委員会2005『香川県の近代化遺産』
香川県教育委員会2010『香川県の近代和風建築』
香川県商工水産課1939『香川県商工要覧』
香川県立ミュージアム2019『日本建築の自画像』
北山學2015『淡路瓦の歴史』江戸時代を中心に
駒井綱之助1963『粘土瓦読本』
駒井綱之助1972『かわら日本史』
田中稔1980『粘土瓦ハンドブックス』
佐藤竜馬1994「18～19世紀の土器・瓦」『空港跡地遺跡発掘調査概報』平成5年度 香川県教育委員会
佐藤竜馬2000「第5章 第5節 近代遺物からみた林村、空港跡地遺跡」IV 香川県教育委員会ほか
佐藤竜馬2002「傳右衛門と辰蔵、そして玉屋・水屋―高松城下と近郊の瓦生産―」『四国徳島城下町通信』第9号
佐藤竜馬2003「第4節 出土瓦の研究」『高松城跡(西の丸町地区)』II 香川県教育委員会ほか
竹内裕貴2018「第5章 第3節 出土瓦の変遷と系統について」『丸亀城跡(大手町地区)』
多度津町教育委員会2020『多度津町多度津』
谷梢2023「第4章 第1節 2, 出土瓦について」『丸亀城跡(大手町地区)第7次調査』
寺田清1954『現場技術者の為の倒焰式加熱窯の理論と実際』日本印刷出版株式会社
中村伸1949『瓦』相模書房
中村隆1986「「だるま窯」の研究―歴史といぶし瓦の焼成工程―」『日本の産業遺産―産業考古学研究―』玉川大学出版部
中山尚子・乗岡実2022「第4章 第2節 1. 屋根瓦」『坤櫓跡発掘調査報告書』
乗岡実1996「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世社寺建築』岡山市教育委員会
乗岡実2021「岡山城下の瓦作り」『就実大学史学論集』第35号 就実大学総合歴史学科
乗岡実2022「岡山県南部に分布する江戸時代中後期の瓦―産地・工人・文様を読み解く―」『就実大学史学論集』第36号 就実大学総合歴史学科
乗岡実2023「岡山県南部における近世瓦の流通」『就実大学史学論集』第38号 就実大学総合歴史学科
藤原学2001『達磨窯の研究』学生社
藤田元春1967『日本民家史』刀江書院
藤森照信1993a『日本の近代建築(上)』―幕末・明治篇― 岩波書店
藤森照信1993b『日本の近代建築(下)』―大正・昭和篇― 岩波書店
埋蔵文化財研究会2017『幕藩体制下の瓦』
間壁忠彦2001「倉敷の屋根瓦とその産地」『倉敷の歴史』第11号
間壁忠彦2002「江戸後期と明治の民家屋根瓦」『倉敷の歴史』第12号
松沢裕作2022『日本近代社会史』有斐閣
山崎吉弘2019「近代・現代の瓦とその多様化」『考古学ジャーナル』726
渡邊誠2017「四国における近世瓦の生産と流通―高松藩における御用瓦師の成立―」『幕藩体制下の瓦』埋蔵文化財研究会
渡邊誠2019「瓦が語る建築の歴史の一コマ」『日本建築の自画像』香川県立ミュージアム
渡邊誠2021「近代瓦生産の基礎的研究―高松地域を事例として―」『持続する志』岩永先生退職記念事業会

種別
年代

軒丸瓦

軒平瓦

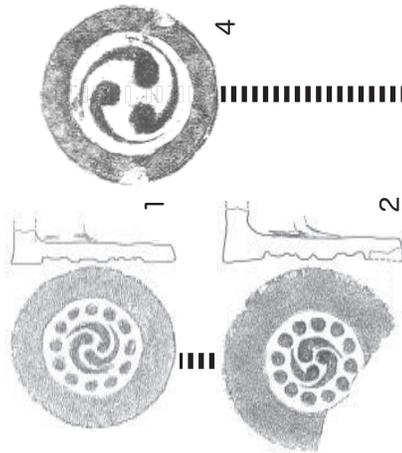
軒棧瓦

1800
(寛政12年)

檀紙・御厩系

2類

1類



1A類

1B類

1C類



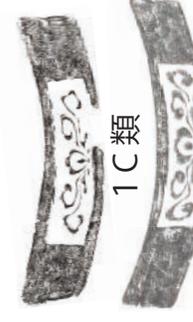
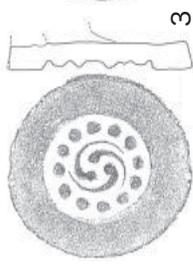
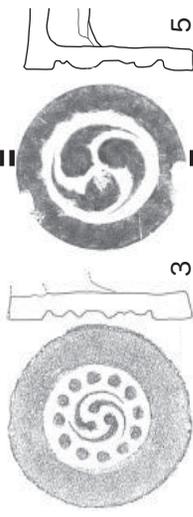
8

9



10

11



新瓦町系

1850頃

2+1B類

1+1A類



18

19

20

1887年頃
(明治20年)

無文化

3類

2類

3類

4類

5類

2類

3類